

技術者教育と文学

— 漱石「こころ」と科学随筆を起点として —

Engineering Education and Literature
— Case Study started from Soseki "Kokoro" and Scientific Essay —

久保 和良
Kazuyoshi KUBO

1. 緒言

筆者は文学者ではない。これは文学を系統的に学んだ経験がなく、かつ研究実績も有たないことを意味する。本稿は技術者の書いた技術者のための文学入門奮闘記であることを、初めに白状しておく。学問を文系と理系に分断して自分の立場を明確にする言い訳が人口に膾炙されている。そもそも人間の知はすべての方面で機能するから、学の分化は人事の不幸である。筆者は文系と理系を分ける立場をとらないが、ここでは例えば文学らしきものを便宜上「文学」という記で代表させる。

本稿執筆の因縁は次のとおりである。筆者は2003年から計測自動制御学会の「SICE領域技術者教育における企画・設計能力開発と評価に関する調査研究会」の幹事を務めた折、全国大学等の優れた技術者教育の取り組みを調査し、議論した。その中で工学部学生の国語力低下が話題になったとき、ある企業の委員が「文芸春秋を読め」と発言され、それ以上の好案が見当たらなかったと記憶する。その後、同学会の教育・認定委員として技術者教育のCPD (Continuing Professional Development: 継続的能力開発) を議論した経緯を踏まえて、技術者の国語教育が重要であると考えようになった。筆者は工学教育を受ける中で、技術者は定量的で客観的な文章を書くべきと習った。しかし筆者の企業時代の上司は報告書に「相応しい」、「盛況であった」などと書いていたし、大学の指導教授は論文の中で「便利である」、「稚拙な」などを用いていた。それら主観的表現は適所適切に使われ、表現の簡潔さに貢献していた。これらは文学的素養を基礎にしていると考えられる。技術者の文学的素養の重要性は言うまでもないが、これまであまり言及されることがなかった。

本稿では技術者として活躍する高専卒業生において、文学的な能力開発が期待される場合に、高専で如何なる教育を受けるのが適切か、また高専の担うべき役割は何かを考える。高専を卒業した彼または彼女が技術業に就き、例えば地方都市に配属されて家族を持ち、社会人として文学的素養を身につけたいと感じたとする。工学的素養と卒業論文執筆経験を持ち、しかし文学者に転身したいのではない。技術業を続けながら学生時代よりも多少は金銭面での自由が利くが、例えば短期大学の文学部に通学するほどの時間的な余裕はない。ゼミに参加して教授の指導を仰ぐことを断念したとして、教師なしの独学によって目標を達成するにはどのようにすればよいであろう。本稿では第1に学生時代に漱石の「こころ」を読んだ経験が、30年後の技術者において独学による文学研究にどのような力になるのかを、筆者自身を実験標本として用いて示す。第2に本校1年クラスにおいて実践した科学随筆 PBL (Project Based Learning) を紹介する。

2. 漱石「こころ」を起点とする文学研究

(A) 30年の前と後

筆者は高校2年生の夏休みに、夏目漱石の「こころ」を読まされた。単行本を各自購入して感想文の提出を求められたと記憶する。哲学論か宗教論だろうと思い、気が進まなかった。初読した30年前の素直な心を持つ若い筆者の感想は次の通りであった。(1)一生のうちにこんなに長い手紙を書くことがあるだろうか、(2)奥さん(静)と私(青年)はアヤシイ、(3)先生の自殺の動機が解らない、(4)読み終えた後「失策った」(下48)何か読み落としがあったのではないかと思った、(5)他の文学作品と違

いツルツルと読める不思議さを感じた。これらのうちの一部をまとめて感想文として提出した。感想文が返却され、教師の説明では筆者の論点にはまるで触れて下さらなかった。解説の要点が次の3点に集約されていて、失望を感じた。(a)「向上心のないものは馬鹿だ」には2つの意味がある、(b)「覚悟」には2つの意味がある、(c)先生の自殺理由は明治の精神にある。さすがに(c)を説明するときの教師にはバツの悪さが見え隠れしていたのを覚えている。受験校としての教育に沿って一生懸命努めたその高校教師に感謝すべきなのかもしれない。しかし読み方を強制されたことで国語嫌いになったのである。それでも高校の国語教師に感謝したいのは、「こころ」を1冊買って読むことを指示して下さったことである。即ち国語と称するものに2つあること―「国語という受験科目」と「文学という人間の一面を豊かにする愉しみ」―を自ら知って、後者に強く惹かれていった。1冊を読み通した経験が、自分の読み方で文学を楽しむことを筆者に続けさせている。

高校青年が30年経って当時を振り返ったとき、事実を確認すべきと考えた。そこで田舎に帰省した折、酷くかび臭くなった当時の現代国語教科書とノート、青年だった頃の自分が書いた提出感想文を押し入れから探し出して持ち帰り、天気の良い日に濡れ縁で1ページ毎に風を通してみた。尚学図書「高等学校新選現代国語二」（昭和52年発行）の著作者に三好行雄が含まれていること、その教科書には123～160ページに「こころ」の下の一部「カルタ取りからKが自殺した未明まで」が収録され、漱石原稿の第1ページが縮小写真で掲載されていることを確認した。ノートには9月3日から11月21日まで、11回の「こころ」授業が行われている様子がつぶさに記されていたが、これほど長く講義を受けた記憶は既がない。内容は難しいことを難しく語っている印象である。感想文は原稿用紙6枚で、「こころ」を3回読み返してその度に新しい発見があること、先に述べた素直な感想の一部を作者の人生観と作品の矛盾点などを交えて書いてあり、Kおよび先生の自殺の理由を「気の弱さ」に求めてあった。教師からのコメント記入はなく、ただ筆者が書き忘れた出席番号を教師の筆で書き加えてあった。30年の時間は記憶をずいぶん鈍らせるものである。中等教育としては十分と思われる当時の教育の実態は、やはり現在の筆者には魅力的には思われない。

(B) 文学研究試行錯誤

助言者のいない研究を始めるにあたり、まず参考文献の不足を感じた。半年ほどの間に収集できた文献を付録1に示す。振り返ってみると、初めに手引書^{K02})を見つけて信頼できるテキスト^{T01-T03,T07,T08})を入手し、次に正確な研究史^{K03-K05})と論文リスト^{K05})を手に入れて、論文集成^{K08,K09})を入手し、興味を広げながら文献を収集すれば効率が良かったと思われる。身近な図書館に、手にとって読める専門書が極めて少なかった。アマゾン、日本の古本屋などのネットサイトが役に立った。

漱石の原稿^{T01})は岩波書店が保有しており、その復刻が1993年に価格約22万円で限定480部販売された。カラー印刷された自筆原稿はブルーブラックインクによるもので、連載百十回分、おおむね毎回8枚である。インクの濃淡から、おそらく初めに一日分を一気に書いておいて、次に推敲を加えていたものと思われる。初出^{T02})は東京朝日新聞であり、初版^{T03})は漱石自ら装丁を行い自費出版の形で岩波書店から発売された。タイトルについては原稿は「心」に「こゝろ」のルビがつき、「先生の遺書」という副題がつく。初出も同様であるが、ルビは「こゝろ」と「こころ」が混在する。初版では函の背に「心」が、本の背に「こゝろ」が、本文に「こゝろ」が使われている。全集は岩波旧版^{T05})の本文に問題が指摘されており^{K02})、集英社版^{T07})が信頼できるとされてきた。この版には荒正人の校異表⁰³⁵)が掲載されている。漱石の研究年表も荒正人のもの^{N24})が詳しい。岩波旧版のテキストで満足できるならコンパクトな新書版^{T04})がよく、角川版^{T06})は同時代の書簡や批評などがまとまっていて便利である。現在では新版の岩波全集^{T08})が校異を詳細に検討してあり信頼できる。文庫は入手できるほとんどの文庫^{T11-T20})を比較してみたが、文字の読みやすさや漢字の多さなど各社が特徴を持ち、好みで選べばよい。解説や鑑賞を読むのも楽しみであるなら、小森の解説⁰⁶⁷)があるちくま文庫か、異例の現代読み⁰⁸⁰)を収録した集英社文庫が面白い。いずれも著作権が切れた関係であろうか、400円程度の廉価である。テキスト検索にはウェブの青空文庫が便利であるが、信頼のできる全集は必須である。英語版はMcClellanの翻訳^{T22})が有名で、翻訳者の解説⁰⁸³)もある。特に文化の違いの表現は興味深く、たとえば「先生」をSenseiとしたあたりに苦勞を感じる。中国語版^{T23})では「御嬢さんを私に下さい」、「宜

ござんす、差し上げませう」(下45)は「請把小姐給我吧」、「好、給你吧」と翻訳され、小気味良さがある。英語版では「I want to marry Ojosan.」、「All right, you may have her.」となり、思考の微妙な食い違いが興味深い。

高校教育の強力な「こころ」資料として井上の研究書^{K06}があり、高専での教育については井上の報告^{K07}がある。半年間で収集できた「こころ」の研究論文と資料を付録1に列挙したが、本業の傍らでの収集と読解では全てを読み切ったとは言えない。各著者の気迫に敬意を表したうえで、便宜のため研究史を石原・小森論^{066,067}以前と以後に二分する。石原・小森以前は、先生を青年の「精神上の父」として下(先生と遺書)に重点を置いた自我論としての小宮論⁰⁰⁸や、存在論としての越智論⁰²⁷を経て相対論へと向かう、後の研究に影響を与えた、いわば古典論としての名著がある。それに対して石原・小森論は「余所々々しい頭文字などはとても使ふ気にならない」(上1)とした先生こそが親友Kを余所々々しい頭文字で呼んだ点に注目して、小森論⁰⁶⁷は青年が「『奥さん』—と—共に—生きること」を導き出し、一方石原論⁰⁶⁶はオイディプスとダブルバインドに言及して3つの位相(表層、物語の層、深層)のうち深層において反転する語りを論じている。

いま、シャノンのモデルを簡略化して、システムSがシステムRに情報Tを伝達しているとしよう。Sを漱石、Tを「こころ」のテキスト、Rを読者とすれば、SとTはほとんど固定して変化はしない。一方Rは変化し、また多様化する。初読の青年R₁に対して既読の青年R₂は読みに変化があろうし、初読の大人R₃はR₁とは異なる。戦前の読者R₄と現在の読者R₅も当然異なったシステムである。S—Tに注目した理論を作品論と呼び、Sの機能を明確にするために漱石の他の作品を引き合いに出す傾向がある。一方T—Rに注目した理論をテキスト論と呼び、石原・小森論はテキスト論の立場で構造の領域に踏み込んだ新しい理論として注目に値する。これが筆者の認識である。古典論の立場に立つ文学者R_cは入力Tに対して出力P_cなる論文を書く、これが教育に利用されて読者Rを教育者R_{ec}に変える。教育者は生徒Rを古典論の読者R_{rc}に変えようとする。これに拒絶反応を示したのが高校生の頃の筆者である。小森論⁰⁶⁷では「国家の反動的なイデオロギー装置と化した『こころ』という(作品)を打つ」意図が明確に述べられているし、シンポジウムにおける氏の発言「基本的な僕の発想方法は、高校時代の現国の授業における『こころ』の授業に対する恨みによって形成されました。」¹¹⁰⁾にみるとおり、拒否反応を示す高校生は少なくないはずである。それに逆行して昭和38年ころから下(先生と遺書)に重点を置いた「こころ」が現代国語教科書の定番となっているのは、当時の「純潔」教育と、古典論を基礎とする「先生から教をいただく弟子という構図」が、ある意味で官民一体となった後押しによって実現されているからであろう。

「こころ」の研究では、案外女性の発想が鋭い所を突くように思う。円地⁰²³は「心」が成功した作品で英文学の影響がじっくり摂取された最初の作品としながらも、「お嬢さん」が「自分を愛したために二人の男の中の一人が死んだ」のに「全く無傷でいられる」ことに好意を感じないと言っている。吉永⁰⁸⁰は「死ぬの生きるのと騒いでいる先生より、奥さんのほうが『人間の心を捕え得たる』」とし、青年の今後を「よほど心配」と述べている。秦¹⁰⁶は短大授業で女子学生のレポートによると、(1)よるべない妻を残して覚悟の自殺をあえてする先生を「無道」であり奥さんが気の毒すぎることに、(2)臨終近い父の枕べから青年が東京へ出奔するのは不自然すぎることに、の2点にあからさまな不満ないし非難を隠さなかったとしている。(2)は筆者も気になっていて、青年の実家はおそらく夕方出て、明日午前東京から戻れる距離にある田舎、当時の土浦か小山あたりであろうと考えていた。この点については優れた謎解きがある。木村ら¹⁷⁷は消去法により乾椎茸の産地と「俤」を自在に雇える点から、青年の郷里は修善寺であることを解き明かしている。

静の笑いに注目した研究^{051,079}がある。静は多く語らず多く笑う。先生は多く語り、しかし多くは笑わない。男と女が双対になっている。「奥さんは黙ってゐた」～「先生は『天罰だからさ』と云って高く笑った」(上8)は、極めて不気味である。石原^{N61}によれば「最近、『こころ』が『いじいじした男たち』だけの『身勝手な物語』であることに、特に女子高生からの反発も少なくない」し、「『こころ』は学校空間で読むには危険すぎる小説」であることを指摘している。「こころ」に代わる現代小説は「ノルウェイの森」であろうか。「こころ」とのかかわりを論じた文献^{144B10}もある。

(C) 30年後の解答

筆者が「こころ」を初読した30年前の素直な「心」に対して、30年後の筆者が解答を試みる。まず「こころ」のテキストには多くの矛盾があることを研究者たちが指摘している。一例として米田⁰⁶⁵⁾は、先生からもらった手紙の数が合わない、上で自分の妻さえ墓参りに連れて行っていないと言いつつ下では妻と墓参している、夕方のわずかな外出にも留守番を頼む先生が長く家を空けて自分だけ海水浴に行っている、など多数指摘している。きちんとした文章の書ける漱石だけに、漱石は確信犯なのだろうと筆者には思える。その上で「(1)一生のうちにこんなに長い手紙を書くことがあるだろうか」に対しては、「袂の中へ先生の手紙を投げ込」(中18)める分量ではない手紙の謎は水川¹⁷⁵⁾によれば志賀直哉が「心」の次に予定されていた新聞連載小説が書けないと断ってきたからというのが一つの要因である。この時、漱石は下34あたりの執筆中で、小説をできるだけ引き延ばそうとした。さらに「こころ」は作り話だからという説明でどうだろう。研究者は「こころ」のテキストを青年の「手記」と呼ぶ。しかし筆者には、まずは漱石から手渡された小説文字列と思える。もし漱石が存命で、「あなたというシステム R_x は何を出力しますか？」と問われたら何と答えるであろう。自分の「心」がそのまま飛び出しかねない恐ろしい問いである。「ひとつだけ、あえて誤りを入れておきました。」と言われたら、どこが誤りであろう。このとき、解析力学の仮想変位の原理が応用できる。即ち、拘束条件を壊さない範囲で1か所ずつ次々に変えてみる試みが可能になる。たとえば「青年は先生の存命中に奥さんと関係をもった」とすればどうか。また青年が東京に戻った時、先生は存命で、後に事故死した可能性もある。先生は「死んでいた」、「生きていた」、「行方不明」の3元事象系を構成し、そのエントロピーはおそらく0 bitに近いが、0とは断定できない。仮想変位に対する仕事を定義して、それが不変になる条件が、新たな研究成果を導く可能性がある。テキストを「青年の手記」と決めつけるのは、その次の段階でよい。「(3)先生の自殺の動機が解らない」に対する解答は、与えられているテキストのみから特定するのは無理があると答えたい。なぜならば「貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れません」(下56)とあり、漱石が特定できない流儀で書いている。特定したいのであれば、新たな条件を加える必要があるし、その条件は読者の「心」を反映したものになり、従って「読み手の“こころ”によって解釈が変容する」^{T21)}小説になっている漱石の狙いが見える。「(4)読み終えた後「失策った」(下48)何か読み落としがあったのではないかと思った」に対しては、テキストが多くの矛盾を含み、汽車に乗ったまま遺書を引用したところで読者が放ッポリ投げられているからと答えよう。「こころ」のテキストは円環構造¹⁷³⁾をもち、上中下は重層的な円環を描く時間の中で相互に対話的にかかわって⁰⁶⁷⁾いて、それらは入れ子構造¹⁷⁷⁾を持つ。「(5)他の文学作品と違いツルツルと読める不思議さを感じた」のは初出の新聞連載で漱石が読者の心を惹いて止まない巧みな芸術の仕掛けとしてのサスペンス技法⁰⁵⁶⁾を用い、ミステリー⁰⁸⁴⁾としても読みうる書き方をしているためだろう。

(D) 試行錯誤を通じて考えたこと

いわゆる理系研究では何らかの新機軸を主張して、それを自ら公理、定理、法則などをもとに証明するか、実験、設計、試作、シミュレーションなどによって実証することが求められる。工学研究を学んだ筆者が文学論文を読んで思うことは、文学研究では客観的な証明が必ずしも必要とされていないことである。従って、新しい論文にはそれに対する批判論文が出て、論戦に発展した場合にどちらも可能であるという結論に行き着いてしまう。例えば石原・小森論は構造に立ち入った優れた論であるが、これすら「深読みに過ぎる」という理由で批判されるのである。秦が戯曲「こころ」⁰⁷⁰⁾で青年と静との結婚を書いたとき、三好が先生はコキユカ⁰⁷¹⁾と敏感に応じ、秦がコキユではない⁰⁷²⁾と応じて、三好はワトソンは背信者か⁰⁷⁴⁾で小森・石原・秦に反論^{K04)}したいいわゆる「こころ」論争がある。古典論と新しい読みが折り合いを持たず、石原・小森論以降にあっても二項対立が根強い。「こころ」論争以降とする座談会¹³⁸⁾で平岡の石原・小森に対する果てしのない苛立ち¹⁴⁹⁾を石原は「それが不毛だったとは思わない」とまとめている。藤井の注釈^{T10)}は、「凡てを腹の中に仕舞って置いて」(下56)の説明で「私の手記は作品そのもので、だとしたらそれを」～「不可能であろう」と、仮定を前提として新しい読みを排除している。権威ある注釈書としては疑問が残る。

漱石の自筆原稿^{T01)}が復刻されて、「こころ」の研究は一步進んだように思われる。例えば「紅葉の葉を一枚封じ込めた郵便も貰った。」(上9)と書いてあり、従来は青年が先生からもらった手紙の数が合わないと考えられていた。しかし自筆原稿ではその次に「(尤も是は奥さん丈の趣向であったが。)」とあり、これが漱石によって削除されている。石原ら¹⁰⁰⁾は、紅葉の郵便は奥さんから青年への封書であるから、先生からの手紙の数が合うとしている。このことは先生の生前に静が青年に手紙を送っていたことを意味する。一方、十川¹⁴⁵⁾は削除は書き手がそれを不適當とみなしただけのこととして、石原らの説を否定している。二項対立の批判は「こゝろ」論によく見られ、一方が「Aは可能だ」と言い、他方が「not Aは可能だ」と主張するもので、情報理論の2元完全事象系を形成する。冷静にみると事象系の提起をした第1論者が先駆者であるのに、第2論者のほうが優勢に見えてしまう。二項対立の最大エントロピーは1 bit である。これを拡張すると、「こころ」110回の各々に10程度の事象系を形成し、各事象系を5元で見積もれば全体で5500通りの論が可能である。5500元事象系の最大エントロピーは12.4 bit 程度であり、多めに見積もっても「こころ」論の最大エントロピーは20 bit 程度であろう。これを0 bit に近づけるのが文学者の仕事である。工学的手法は新しい「こころ」論の突破口になる可能性を持つ。例えば1100の事象系を遺伝子に対応させてまずヒューリスティックに枝刈りをする。次に遺伝的アルゴリズムが適用できる。不確定性を論じるなら2軸の分散に注目すればよい。曖昧さは ambiguity、fuzzy、obscure、unclear のいずれかを明確にすればよい。両立できないトレードオフはパレート最適と選好解を論じればよい。

漱石自筆原稿で気づくことは、主語の「私」の挿入削除が多いことである。よほど自我について気をつかったものと思われる。カッコ記号の追加挿入は少なくとも13か所あり、うち1つは上述紅葉の件で削除されて、もう1つは初版の段階で削除されている。その中で気になるのは、上17の奥さんが青年に語る部分で「そりゃ私から見れば分かってゐます。(先生はさう思っていないかも知れませんが)。あの人は～」の()記号が後から挿入され、「あの人は」が「先生は」に訂正されている。素直な青年だった筆者が「(2)奥さん(静)と私(青年)はアヤシイ」と思ったのは、(1)自分の夫を青年の前で「あの人は」ではなく、「先生は」と呼んでいること、(2)青年が書いている手記の中で奥さんの語った部分に()記号がついていること、即ち青年は発言のありのままを書いていなくて、なおかつ後からこの部分を奥さんに聞いたかのように感じたこと、そして(3)青年が留守番を頼まれた晩に「下女丈は仮寝でもしてゐたと見えて、ついに出て来なかった。」(上20)と書いてあるからである。井原⁰⁷⁶⁾にも指摘があるが、戸松¹¹⁸⁾によれば、上16で奥さんが下女に話している声が聞こえ、後はしんとした、上18で下女部屋はことりとも音をさせなかった、上20で下女丈はついに出てこなかった、以上の記述により「明らかに『今』の『私』が、当夜『奥さん』が下女を外出させていたのだということを暗に確信していることが知られ」、「『奥さん』はこの夜の夫の不在を利用して、『私』と過ごす時間を目的を持って使おうと意図していた」ことが手記を書いている青年に見えてきたとの指摘がある。合わせて、先の「紅葉」の説を採用し、先生の生前に奥さんが青年に手紙を送っていたとすれば、留守番当夜、静は青年に性的な誘いかけをした可能性があり、その場合青年はそれに気づかなかったか、気づかないふりをしていた可能性がある。青年が現在書いている手記には事実を見誤らせるような編集が見られ、「アヤシ」さを感じさせる。

(E) 位相の循環構造

石原の「こゝろ」のオイディプス⁰⁶⁶⁾によれば、3つの位相、即ち語りの層(表層) P_1 、物語の層 P_2 、深層 P_3 で語りが反転する。リニアなシステムの固有関数である正弦波とのアナロジーで考えれば、 P_1 が正弦波、その90度位相のずれたクアドラチャ成分の余弦波が P_2 、さらに90度位相のずれた逆相正弦波は P_3 に対応し、反転する。これは微分または j 演算子によって $P_1 \rightarrow P_2 \rightarrow P_3 \rightarrow P_4 \rightarrow P_1$ の順で循環遷移するから、おそらく未だ文学で提案されていないもう一つの層 P_4 が存在するであろう。もちろん $-j$ 演算子により、逆向きの循環も可能である。この類推によれば、層 P_4 は層 P_2 の双対である。一つの可能性を述べるなら、 P_2 が男の物語としてオイディプスによる父親殺しの原理に基づくとすると、その双対層 P_4 は女の物語としてエレクトラコンプレックスによる母親殺しの原理に基づこう。もしそうであるなら、静は母親の言いつけを裏切る物語が存在するはずである。「父親のない憐れな子」(下45)

の復権を帝大生との縁組に求めるなら、母親の言いつけは「先生と仲良く添い遂げよ」であろう。石原の著書¹⁷⁴⁾を念頭に置けば、「みんな知っていた」静は、夫が自殺するであろうことを予測して、あるいは予測せずとも先生を追い込み、3歳違いの青年と暮らして貰い子ではない子をもうけるであろう。大人になれなかった先生と、大人になった静と、大人になる覚悟ができた青年の物語は、怖すぎる話であろうか。「こころ」のテキストは円環構造を持つと言われているが、ここでは読みの位相にも循環構造を有つ可能性を述べた。

3. 科学随筆を起点とする技術者教育

漱石と寺田寅彦^{N68)}との関係は夙に有名である。寅彦は多くの文系、理系の成果を残し、以来いわゆる科学随筆というジャンルができていく。昨年度、科学随筆を調べ読み表現するPBLを1年電子制御工学科のクラスで実施した。これは一般科目理科の授業6コマ(50分×6)が都合により実施できなくなった時間を筆者が代講の形で譲り受けて即興的に実施したものである。2008年10月22日(第1日)午前の1~4限(200分)をプロジェクトの実施、1週間の宿題(およそ300分)をチームプロジェクトの遂行、2008年10月29日(第2日)午前の1~2限(100分)をプレゼンテーションに充てた。17チームごとに1人の著名な科学技術者の大テーマを割り当て、各テーマに2ないし3の個人テーマ(科学技術者の生涯、随筆、記事などの調査)を割り当てた。この個人テーマは小テーマとして学生39名ごとに割り当てた。付録2にテーマリストを示す。

紙幅の都合で手順と結果を簡明に記す。事前に学生に配布する手順書とテーマリストを作成し、学生には2~3人のチーム分けを指示し、前日に図書情報センターで全ての資料が存在することを確認しておく。第1日目は教室に集合し20分間で手順を説明し、担当割り当てを決定する。以降図書情報センターに移動して、学生に資料収集と報告書作成をしてもらう。教員はその作業を見守り、3回コンタクトをとる。第1回は出欠確認と作業の進捗報告、第2回は出欠確認と資料が採せなかったチームにはその資料がある場所を教え、セーフティネットを張る。第3回は出欠確認と報告書の書き方の指導を個別に行う。12時に教室に集合して、学生各自のA4手書き1枚のレポート(個人)を提出させる。宿題は100分をチームごとにインターネット調査及び校外図書館の調査、100分をチームごとのA4手書き1枚レポート作成と提出(チーム)、100分をチームごとのプレゼンテーション練習として指示しておく。放課後も教室に残って議論している姿が見られた。提出されたチームレポートは印刷して第2日目に配布した。この日はチームごとに教室でプレゼンテーションを行った。1チーム当たりの発表時間は3~4分として、発表後に学生に他者評価と感想を書いてもらった。学生たちはよく調べ、レポートも個性に富んだものを書き、発表も一生懸命上手にこなしていた。指導方針は基本的に学生の背中を見守る、提出物の内容に細かい注文をつけない、学生をよく見て助け船を出す、それくらいでうまくゆく。学生たちは自分の持っている能力を発揮していた。学生たちの感想は、発表まで出来た達成感に満ちていて、いろいろな科学技術者に興味を持ったと多くの学生が書いてくれた。図書情報センターを活用する試みは成功したものと考えられ、センターはうまく機能している。学生たちが素晴らしい向上心をもっていることを考え合わせれば、文学と科学技術にまたがる教育は可能といえる。

4. 結言

高専は外部資金の獲得を言われるようになり、その運営の隘路から卒業生を中心に据えてみた。高専ができる使命の1つはCPDである。即ち技術者となった卒業生がまた高専を訪れ、社会人として能力開発の場として高専を活用する。高専には学を提供する教員がいて、図書館には知の蓄積がある。なおかつ学会と連携する活動の中で収益にもつながるものを。また高専では外部評価に対応して、年度毎に授業科目毎の学生評価を受けて改善を図った証拠を残す活動があるが、年に1度のサンプリングでは標本化定理により2年以上の周期の変化情報しか反映できない。況してや学生が卒業後20~30年経った中堅技術者において、学生時代の授業がいかにか有益であったかをフィードバックする必要があり、制御理論でのネガティブフィードバックの引き出し点を間違えている。

これらを意識して、第1に学生時代に読んだ漱石の「こころ」を起点として、30年後の技術者にお

いて教師なしの独学で文学研究に親しむ取り組みを実施した。この際、地方都市に住む筆者自らを標本に用いた。結局学生時代に「こころ」のテキストを読まされたことが役に立った。広い土地にまず礎の太い杭を打ち込まれたかのようなのである。30年前の素直な「心」は古典論を迂回しながら、意外にも現在の研究要点を捕えていた。第2に科学随筆を調べ読み発表させるPBLの事例を紹介した。筆者の試みを踏み台にして多少ともこの方面が盛んになれば、文学の裾野が広がる意味において文学者、技術者双方の便益につながろう。時間に追われる技術者が文学に親しむためには、生活の細切れになった時間を見つけて本を読む、そのためには短い随筆などを駅のホームで取り出す、あるいは寝る前のほんの10分を短文読みと簡潔日記を記すために割り当てる、そのような習慣を身につけることが、文学的能力の涵養につながろう。学生時代にそのような種を蒔いておくことが重要と思われる。筆者の無学から偏った文学を論じた可能性があることを恐れ、ご批判を賜りたい。

小山高専の図書情報センターには信頼できる漱石の全集すらないことに驚きつつも、時間を見つけては小山市立中央図書館に通い、それを補った。しかしながらそれでも十分な文献を得ることができず、ネットサイトを併用して、かなりの文献収集が行えた。入手が困難な文献については、図書情報センターを利用して、文献複写や図書の貸借によってカバーできた。幸いにも本校図書情報センターのスタッフは丁寧に、かつ迅速に対応してくださった。スタッフにお礼を述べたい。

筆者を国語嫌いにした高校現国の中等教育は、石原・小森論以前の、しかも大学受験を念頭に置いた特殊教育である。小山高専の国語教育は高等教育であり、先輩同僚の授業を参観すると心にしみ入るような文学素養を涵養する授業が展開されている。この点は30年前の筆者の置かれた状況とは異なる。小山高専は、教員、図書情報センターともに文学素養に関して十分なCPD能力を有する。

大学を出ずに20代で校長になった筆者の祖父は、国語の教師であった。母も大学出ではないが、夥しい本を遺した。当時の本は、上等な紙とインクのおかげがした。もともと筆者は国語が好きなのである。学歴と文学が無相関であることを教えてくれた父娘、亡祖父と亡母に本稿を捧げたい。

〈付録1〉研究資料リスト

- 【「こころ」のテキスト、注解、訳本】
- T01) 漱石：心（こころ）先生の遺書，岩波書店所蔵（1914）〔復刻／岩波書店：漱石自筆原稿「心」，岩波書店（1993）（附／解説^{K032}）〕
- T02) 漱石：心（こころ）先生の遺書，東京朝日新聞（1914）〔復刻／玉井ほか編：夏目漱石集「心」，和泉書院（1991）（附／校異、注）〕
- T03) 夏目金之助：心（こころ），岩波書店（1914）〔復刻／日本近代文学館：名著復刻漱石文学館・夏目漱石著こころ，ほるぷ（1975）〕
- T04) 夏目漱石：心，漱石全集（新書版）第十二巻，岩波書店（1956）（附／小宮豊隆：解説⁰¹⁴）
- T05) 夏目漱石：心、道草，漱石全集（岩波旧版）第六巻，岩波書店（-1966）（附／小宮豊隆：解説「心」⁰⁸⁸）
- T06) 夏目漱石：こころ他，夏目漱石全集（角川版）第十一巻，角川書店（1960,1973）（附／吉田精一：解説⁰¹⁷、注釈／ほか）
- T07) 夏目漱石：彼岸過迄、こころ，漱石文学全集（集英社版）第六巻，集英社（1983）（附／荒正人：解説、校異⁰³²／荒ほか：注解）
- T08) 夏目漱石：心，漱石全集（岩波新版）第九巻，岩波書店（1994）（附／重松泰雄：注解／岩波書店：後記、校異）
- T09) 遠藤祐：こころ，注釈、夏目漱石集IV，日本近代文学大系第27巻，角川書店（1974）（附／高田瑞穂：解説—漱石の晩年—）
- T10) 藤井淑禎：心，注釈、漱石文学全注釈12，若草書房（2000）（附／藤井淑禎：同時代小説としての「心」）
- T11) 夏目漱石：こころ，岩波文庫（1927初版／1989改訂）（附／（初版）小宮豊隆：「こころ」解説⁰⁰⁵／（改訂）古井由吉：解説）
- T12) 夏目漱石：こころ，角川文庫（1951初版／2004改訂）（附／（改訂）宮井一郎：夏目漱石一人と作品／中村明：作品解説）
- T13) 夏目漱石：こころ，新潮文庫（1952初版／2004改訂）（附／（改訂）江藤淳：漱石の文学／三好行雄：「こころ」について）
- T14) 夏目漱石：こころ他一編，旺文社文庫（1966）（附／稲垣達郎：人と文学、作品解説、作品鑑賞／堀秀彦：「こころ」について）
- T15) 夏目漱石：こころ，講談社文庫（1971）（附／江藤淳：伝記、「こころ」について）
- T16) 夏目漱石：こころ，ポプラ社文庫（1980）（附／吉田精一：夏目漱石の人と作品⁰⁵³）
- T17) 夏目漱石：こころ，ちくま文庫（1985）（附／夏目伸六：父夏目漱石／小森陽一：解説「こころ」を生成する心臓（ハート）⁰⁶⁷）
- T18) 夏目漱石：こころ，集英社文庫（1991）（附／菊田均：「淋しさ」から「自殺」まで／吉永みち子：こころを捕えたのは誰!?⁰⁸⁰）
- T19) 夏目漱石：こころ，坊ちゃん，文春文庫（1996）（附／江藤淳：夏目漱石伝、作品解説）
- T20) 夏目漱石：こころ，夏目漱石II、III，大創出版（2005-2006）〔底本／青空文庫〕
- T21) 夏目漱石：こころ，デカイ活字の千円文学，やまのん（2009）〔底本／新潮社（1991）〕
- T22) Edwin McClellan（訳）、夏目漱石：KOKORO（英文，Tuttle（1969））
- T23) 周大勇（訳）、夏目漱石：心（中国語，上海訳文出版社（1983））
- T24) パラエディアートワークス、夏目漱石：こころ（まんがで読破），イーストプレス（2007）
- 【「こころ」の研究史、教育、特集、論文集成】
- K01) 石崎等：こころ（研究史），夏目漱石必携^{N32}，別冊国文学5，学燈社（1980）
- K02) 石原千秋，こころ，近代小説研究必携1^{B03}，有精堂（1988）
- K03) 石原千秋：I「心」の原稿、II小説の中の時間、III「心」の研究史（1993）（→漱石自筆原稿「心」^{T01}解説，岩波書店（1993））
- K04) 斉藤秀雄：こころ・研究の現在，国文学39-2（1994）（→知つ得・夏目漱石の全小説を読む^{N64}，学燈社（2007））
- K05) 仲秀和：「こころ」研究史，和泉書院（2007）
- K06) 井上孝志：高等学校における文学の単元構想の研究—「こころ」（夏目漱石）の教材解釈と実践事例の検討を通して—，溪水社（2002）
- K07) 井上次夫：漱石「こころ」の授業研究，小山工業高等専門学校研究紀要37（2005）
- K08) 玉井敬之、藤井淑禎（編）：こころ，漱石作品論集成第十巻，桜楓社（1991）
- K09) 猪熊雄治（編）：夏目漱石「こころ」作品論集，近代文学作品論集成3，クレス（2001）
- K10) 平川祐弘、鶴田欣也（編）：漱石の「こころ」—どう読むか、どう読まれてきたか—，新曜社（1992）
- K11) 特集・漱石「こころ」の生成，季刊文学3-4（1992）
- K12) 小森陽一、中村三春、宮川健郎（編）：総力討論・漱石の「こころ」，翰林書房（1994）
- K13) 特集・「こころ」，漱石研究^{N46}6（1996）
- K14) 特集・夏目漱石「こころ」，江古田文学52（2003）

【「こころ」論】

- 001) 無署名:「こころ」(夏目漱石著),時事新報 11188,(1914)(→竹盛天雄(編):夏目漱石必携^{N32},別冊国文学5,学燈社(1980))
- 002) 無署名:心(夏目漱石著),読売新聞 13478,(1914)(→竹盛天雄(編):夏目漱石必携^{N32},別冊国文学5,学燈社(1980))
- 003) 赤木桁平:「心」,夏目漱石,新潮社(1917)(→同時代人の批評,夏目漱石全集(角川版)第十一卷^{T06}(1960,1973))
- 004) 和辻哲郎:「心」「道草」その他,漱石全集(昭和三年版)第九卷月報,岩波書店(1928)(→漱石全集月報^{N27},岩波書店(1976))
- 005) 小宮豊隆:「こころ」解説,こころ,岩波文庫(1935)(→漱石漢記^{N05})
- 006) 阿倍能成:「こころ」を読み,思想 162(1935)(→夏目漱石全集別巻^{N21},筑摩書房(1973))(→漱石作品論集成第十卷^{K08})
- 007) 松岡謙:「心」の時代,漱石全集(昭和十年版)第八卷月報,岩波書店(1935)(→漱石全集月報^{N27},岩波書店(1976))
- 008) 小宮豊隆:「心」,漱石全集(1935)(→漱石の芸術^{N09})(→漱石全集(岩波旧版)第六巻^{T05})(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 009) 森田草平:長篇時代(1942)(→森田草平:夏目漱石,筑摩叢書 90,筑摩書房(1967))
- 010) 滝沢克己:「こころ」,夏目漱石,三笠書房(1943)(→文芸読本・夏目漱石II^{N26})(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 011) 猪野謙二:「心」における自我の問題,世界 36(1948)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 012) 荒正人:「こころ」と「道草」について(1950)(→夏目漱石全集第十二巻^{N11},創芸社(1954))
- 013) 荒正人:漱石の暗い部分,近代文学 8-11(1953)(→夏目漱石^{N18})
- 014) 小宮豊隆:解説,漱石全集(新書版)第十二巻^{T04},岩波書店(1956)
- 015) 伊藤整:こころ—本文および作品鑑賞,近代文学鑑賞講座第五巻,角川書店(1958)
- 016) 玉井敬之:「こころ」をめぐって,日本文学 8-3(1959)(→作品論集成 3^{K09})
- 017) 吉田精一:解説,夏目漱石全集(角川版)第十一巻^{T06},角川書店(1960,1973)
- 018) 玉井敬之:「私の個人主義」前後—「こころ」から「道草」へ—,文学 29-11(1961)(→夏目漱石^{N18})
- 019) 伊沢元美:明治の精神と近代文学—夏目漱石「こころ」をめぐって—,島根大学論集 12(1963)(→夏目漱石^{N18})
- 020) 三浦泰生:漱石の「心」における一つの問題,日本文学 13-5(1964)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 021) 矢本貞幹:夏目漱石の「こころ」,解釈と鑑賞 30-7(1965)(→矢本貞幹:「こころ」の表現技術(加筆),夏目漱石—その英文学的側面,研究社(1971))
- 022) 畑有三:心,国文学 10-10(1965)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 023) 円地文子:漱石雑感,漱石全集(岩波旧版)第九巻月報,岩波書店(1966)(→円地文子:灯を恋う,講談社(1968))
- 024) 高木文雄:ゆるめの必要—「心」—(→高木文雄:漱石の道程^{N14},審美社(1966))
- 025) 稲垣達郎:Xさんへの手紙,岩波版漱石全集第14巻月報(1966)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 026) 遠藤祐:「こころ」,夏目漱石必携(1967)(→作品論集成 3^{K09})
- 027) 越智治雄:こころ,国文学 13-5,6,9,14-8(1968-1969)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 028) 土居健郎:漱石の心的世界,解釈と鑑賞 33-9,10(1968)(→土居健郎:「こころ」について,漱石の心的世界—「甘え」による作品分析,弘文堂(1994))
- 029) 丸谷才一:徴兵忌避者としての夏目漱石,展望 126(1969)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 030) 小泉浩一郎:漱石「心」の根底—「明治の終焉」の設定を巡り—,文学・語学 53(1969)(→夏目漱石III^{N18})(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 031) 桶谷秀昭:淋しい「明治の精神」—「こころ」について—文芸 9-11(1970)(→文芸読本・夏目漱石^{N26},河出書房新社(1975))(→作品論集成 3^{K09})
- 032) 古川久:「心」(→古川久:漱石の書簡^{N16},東京堂(1970))
- 033) 西垣勲:「こころ」覚え書,日本文学 20-9(1971)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 034) 高木文雄:先生の死—「心」を巡って—(→高木文雄:漱石文学の支柱^{N19},審美社(1971))
- 035) 荒正人:解説,校異,漱石文学全集(集英社版)第六巻^{T07},集英社(1971,1983)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 036) 佐藤泰正:夏目漱石「こころ」—<命根>を求めて,解釈と鑑賞 37-4~8(1972)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 037) 相原和邦:「こころ」の人物像,日本文学 21-5(1972)(→相原和邦:漱石文学—その表現と思想—^{N31},塙選書 87,塙書房(1980))
- 038) 平岡敏夫:「消えぬ過去」の物語,文学 41-4(1973)(→平岡敏夫:漱石序説^{N29},塙書房(1976))
- 039) 平岡敏夫:明治の精神,国文学 18-5(1973)(→(改稿)平岡敏夫:「こころ」—「明治の精神」を中心に,漱石研究^{N36},有精堂(1987))
- 040) 大岡昇平:「こころ」の構造,文学界 27-9(1973)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 041) 三浦哲郎:自殺に惹かれて,夏目漱石全集(角川版)第十一巻^{T06},角川書店(1973)
- 042) 小坂晋:卵形世界からの脱出—「行人」「心」の秘密—(1974)(→小坂晋:漱石の愛と文学^{N23},講談社(1974))
- 043) 平岡敏夫:「こころ」の漱石,文学 42-5(1974)(→平岡敏夫:漱石序説^{N29},塙書房(1976))
- 044) 江藤淳:「心」—所謂「漱石の微笑」,決定版・夏目漱石^{N25},新潮社(1974)
- 045) 宮井一郎:その二「こころ」(1974)(→宮井一郎:夏目漱石の恋^{N28},筑摩書房(1976))
- 046) 中島国彦:「こころ」,朝日小事典・夏目漱石,朝日新聞社(1977)(→江藤淳(編):朝日小事典・夏目漱石^{N30},朝日新聞社(1977))
- 047) 山崎正和:淋しい人間,ユリイカ 1977-11(1977)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 048) 山田輝彦:「こころ」試論—明治への鎖魂歌—,福岡教育大学紀要 27(1978)(→山田輝彦:夏目漱石の文学^{N33},桜楓社(1984))
- 049) 江藤淳:漱石と中国思想—「心」「道草」と荀子、老子—,新潮 75-4(1978)(→夏目漱石II^{N18})
- 050) 佐々木雅彦:「こころ」—父親の死,漱石作品の世界,夏目漱石必携^{N32},別冊国文学 5,学燈社(1980)
- 051) 寺田健:御嬢さんの「笑い」—漱石「こころ」の一視点—,日本文学 29-7(1980)
- 052) 浅田隆:「明治の精神」周辺—漱石「こころ」私解,日本文学の重層性(1980)(→作品論集成 3^{K09})
- 053) 吉田精一:夏目漱石の心と作品(解説),こころ,ポプラ社文庫(1980)(→夏目漱石:こころ^{T16},ポプラ社文庫(1980))
- 054) 大野淳一:「こころ」梗概と解説,夏目漱石,研究資料現代日本文学^{B02},第一巻,明治書院(1980)
- 055) 秋山公男:「こころ」の方法と構造,日本文学 30-5(1981)(→漱石文学論考^{N39})
- 056) 由良君美:「こころ」の構造,国文学 26-13(1981)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 057) 重松泰雄:Kの意味—その変貌をめぐって—,国文学 26-13(1981)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 058) 江藤淳:「心」における光と闇,講座夏目漱石 3(1981)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 059) 秋山公男:「こころ」の死と倫理—我執との相関—,国語と国文学 59-2(1982)(→漱石文学論考^{N39})(→作品論集成 3^{K09})
- 060) 牧野陽子:いざないの空間—「こころ」と「彼岸過迄」(1982)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 061) 清水孝純:「こころ」—その隠蔽と暴露の構造—,別冊国文学 14^{N32}(1982)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})(→漱石の「こころ」^{K10})
- 062) 松本寛:「こころ」論—「自分の世界」と「他人の世界」のはざま—,歯車 34(1982)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 063) 藤井淑慎:天皇の死をめぐって—「こころ」その他,国文学解釈と鑑賞 1982-11(1982)(→作品論集成 3^{K09})
- 064) 三好行雄:作品鑑賞「こころ」,鑑賞日本現代文学第 5 巻^{N34},角川書店(1984)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 065) 米田利昭:「こころ」を読む,日本文学 33-10(1984)(→挑戦としての失敗作—「こころ」,わたしの漱石^{N41})
- 066) 石原千秋:「こころ」のオイディプス—反転する語り—,成城国文学 1(1985)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})(→反転する漱石^{N53})
- 067) 小森陽一:「こころ」を生成する「心臓(ハート)」,成城国文学 1(1985)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})(→(改稿)こころ^{T17})
- 068) 石原千秋:眼差としての他者—「こころ」,東横国文学 17(1985)(→反転する漱石^{N53})
- 069) 西成彦:陽外と漱石—乃木希典の「殉死」をめぐる二つの文学—,比較文学 28(1986)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 070) 秦恒平:戯曲こころ,湖(うみ)の本 2,版元(1986)
- 071) 三好行雄:近代文学警見(先生)はコキユカ,海燕 5-11(1986)
- 072) 秦恒平:「先生」はコキユではない,ちくま 189(1986)
- 073) 小林一郎:「こころ」論—「心」の多様性の意義を求めて—(1987)(→小林一郎:夏目漱石の研究^{N40},至文堂(1989))
- 074) 三好行雄:ワトソンは背信者か—「こころ」再説—,文学 56-5(1988)(→漱石作品論集成第十巻^{K08})
- 075) 水川隆夫:漱石「こころ」の謎,彩流社(1989)
- 076) 井原三男:漱石の謎をたく・『こころ』論,勁草出版(1989)
- 077) 関谷由美子:「心」論,日本近代文学 43(1990)(→(先生)と呼ばれた男,作品論集成 3^{K09})
- 078) 高田知波:「こころ」の語法,日本の文学 8(1990)(→作品論集成 3^{K09})
- 079) 佐々木英昭:御嬢さんの笑い、嫉妬する漱石(1990)(→佐々木英昭:夏目漱石と女性^{N42},新典社(1990))
- 080) 吉永みち子:こころを捕えたのは誰!? (鑑賞),こころ,集英社文庫(1991)(→夏目漱石:こころ^{T18},集英社文庫(1991))
- 081) 玉井敬之、藤井淑慎ほか:鼎談,こころ,漱石作品論集成第十巻^{K08},桜楓社(1991)
- 082) 木村功:「こころ」論—先生・Kの形象に関する一考察,国語と国文学 68-7(1991)(→作品論集成 3^{K09})
- 083) エドウィン・マックレラン、山本由里子(訳):「こころ」の翻訳について(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 084) 平川祐弘:ミステリーとしての「こころ」(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 085) 池田美紀子:二人であることの病—漱石の「こころ」とポオ(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 086) 成惠剛:「こころ」—先生の告白をめぐって(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 087) 岸田俊子:「こころ」に広がる意味の余白—語られていない物語と象徴的イメージ(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 088) 鶴田欣也:テキストの裂け目(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 089) 大澤吉博:対話から独白へ—複式夢幻能としての「こころ」(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 090) 林連洋:「こころ」のソポクレス式アイロニー(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 091) 汪婉:「こころ」における倫理と自我(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 092) 上田真:「こころ」の結末(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 093) 斉藤恵子:「こころ」は日本でどのように読まれてきたか(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})
- 094) 萩原孝雄:「こころ」は英語圏でどのように読まれてきたか(1991)(→漱石の「こころ」^{K10})

- 095) 鶴田欣也：あとがき、漱石の「こころ」—どう読むか、どう読まれてきたか、新曜社 (1992) (→漱石の「こころ」^{K10})
- 096) 武田勝彦：漱石の東京—こころ、早稲田大学教養語学論集 92 (1992) (→作品論集成 3^{K09})
- 097) 竹盛天雄：初出稿「心 先生の遺書」(一〜百十)を読む I〜IV, 国文学 37-5,39-2^{N64},42-6,+ (1992-1998) (→明治文学の脈動^{B04})
- 098) 藤井淑慎：甦る「こころ」—友情と恋愛をめぐるテキスト—, 純愛の精神誌 (1992) (→研究論文集成 27^{N56})
- 099) 松下浩幸：「こころ」論—(孤児)と〈新しい女〉—, 明治大学日本文学 1992-8 (1992) (→作品論集成 3^{K09})
- 100) 石原千秋、小森陽一：漱石「こころ」の原稿を読む, 季刊文学 3-4 (1992) (→特集・漱石「こころ」の生成^{K11})
- 101) 小森陽一：「私」という〈他者〉性—「こころ」をめぐるオートクリティック, 季刊文学 3-4 (1992) (→特集・漱石「こころ」の生成^{K11})
- 102) 柴市郎：「こころ」論—「独立」と「関係」—, 季刊文学 3-4 (1992) (→特集・漱石「こころ」の生成^{K11})
- 103) 押野武志：「静」に声はあるのか—「こころ」における抑圧の構造, 季刊文学 3-4 (1992) (→特集・漱石「こころ」の生成^{K11}) (→作品論集成 3^{K09})
- 104) ジェイムズ・A・フジイ：「こころ」における、死、帝国、そして歴史の探求, 季刊文学 3-4 (1992) (→特集・漱石「こころ」の生成^{K11})
- 105) 石原千秋：高等教育の中の男たち—「こころ」, 日本文学 1992-11 (1992) (→反転する漱石^{N53})
- 106) 秦恒平：名作の戯れ—「春琴抄」の真実, 三省堂 (1993)
- 107) 松澤和宏：沈黙する K—「こころ」の生成論的読解の試み—, 季刊文学 4-3 (1993) (→作品論集成 3^{K09}) (→生成論的探求^{B06})
- 108) 片岡豊：「こころ」を読むということ—秦恒平の「こころ」理解への疑問, 文芸空間 9 (1993) (→研究論文集成 26^{N55})
- 109) 玉井敬之：「こころ」雑感, 漱石研究 1 (1993)
- 110) 押野武志、宮川健郎、中村三春、小森陽一：シンポジウム・総力討論「テキスト論」以降—「こころ」を争点として (1994) (→総力討論・漱石の「こころ」^{K12})
- 111) 小森陽一：中書き、総力討論・漱石の「こころ」, 翰林書房 (1994) (→総力討論・漱石の「こころ」^{K12})
- 112) 赤間亜生：(未亡人)という記号 (1994) (→総力討論・漱石の「こころ」^{K12})
- 113) 小森陽一：「こころ」における同性愛と異性愛—「恋」と「罪悪」をめぐる—, 総力討論・漱石の「こころ」1994-1 (1994) (→総力討論・漱石の「こころ」^{K12}) (→作品論集成 3^{K09})
- 114) 押野武志：「遺書」の書法—ペンとノイズ— (1994) (→総力討論・漱石の「こころ」^{K12})
- 115) 宮川健郎：再話された「こころ」 (1994) (→総力討論・漱石の「こころ」^{K12})
- 116) 中村三春：「他者」という病—「こころ」のメタ文芸学 (1994) (→総力討論・漱石の「こころ」^{K12})
- 117) 跡上史郎：研究者よ！テキスト論者たらんとせばいま一息だ (1994) (→総力討論・漱石の「こころ」^{K12})
- 118) 戸松泉：「こころ」論へ向けて—「私」の「手記」の編集意図を探る, 相模女子大学紀要 57 (1994) (→作品論集成 3^{K09}) (→小説の〈かたち〉・〈物語〉の揺らぎ^{B05})
- 119) 木股知史：「こころ」—(私)の物語, 解釈と鑑賞 59-4 (1994) (→研究論文集成 26^{N55})
- 120) 島田雅彦ほか：鼎談・漱石を書く—漱石を読む—, 漱石研究 2 (1994) (→様々なポリフォニー, 漱石を語る 2^{N57})
- 121) 高史明：「こころ」を巡って思う, 漱石全集 (岩波新版) 第九巻^{T08} 月報, 岩波書店 (1994)
- 122) 山本道子：人物の重み, 漱石全集 (岩波新版) 第九巻^{T08} 月報, 岩波書店 (1994)
- 123) 重松泰雄：「先生」たちの時代, 漱石全集 (岩波新版) 第九巻^{T08} 月報, 岩波書店 (1994)
- 124) 戸松泉：恋愛小説としての「こころ」, 漱石研究 3 (1994) (→小説の〈かたち〉・〈物語〉の揺らぎ^{B05})
- 125) 松澤和宏：〈自由な死〉をめぐる—「こころ」の生成論的読解の試み—, 漱石研究 4 (1995) (→生成論的探求^{B06})
- 126) 大岡信ほか：インタビュー—明治の青春、漱石と子規, 漱石研究 5 (1995) (→明治の青春, 漱石を語る 2^{N57})
- 127) 蓮實重彦ほか：鼎談・「こころ」のかたち, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13}) (→漱石を語る 2^{N57})
- 128) 水田宗子：〈他者〉としての妻・先生の自殺と静の不幸—漱石の「こころ」への一視点, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13})
- 129) 大橋洋一：クイアー・ファザーの夢、クイアー・ネイションの夢—「こころ」とホモソーシャル, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13})
- 130) 碓香文：静の一面—「心」小考, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13})
- 131) 石崎等：こころの場所、家の場所—「こころ」について—, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13})
- 132) 田口律雄：「こころ」の現象学, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13}) (→作品論集成 3^{K09})
- 133) 高橋広満：定番を求める心, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13})
- 134) 佐藤原：始原の反語—「こころ」について—, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13})
- 135) 中山昭彦：闘争する表象空間—「こころ」論, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13})
- 136) 石原千秋：テキストはまちがわぬ, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13}) (→研究論文集成 26^{N55}) (→テキストはまちがわぬ^{B07})
- 137) 石原千秋：「こころ」論の彼方へ, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13}) (→漱石を語る 2^{N57}) (→テキストはまちがわぬ^{B07})
- 138) 飯田祐子、関礼子、平岡敏夫ほか：座談会・「こころ」論争以後, 漱石研究 6 (1996) (→特集・「こころ」^{K13}) (→漱石を語る 2^{N57})
- 139) 浅田隆：「テキストはまちがわぬ」か?, 漱石研究 7 (1996) (→研究論文集成 26^{N55})
- 140) 石原千秋：それでも「テキストはまちがわぬ」, 漱石研究 7 (1996)
- 141) 戸松泉：「こころ」の読解をめぐる—其一・K の自殺の真相に迫る道, 相模女子大学紀要 60 (1997) (→小説の〈かたち〉・〈物語〉の揺らぎ^{B05})
- 142) 江藤淳：7「心」と「先生の遺書」〜9 自費出版, 新潮 94-9,10,12 (1997) (→漱石とその時代 5^{N17})
- 143) 小仲信孝：「こころ」の家族戦略, 漱石研究 9 (1997)
- 144) 平野芳信：最初の夫の死ぬ物語—「ノルウェイの森」から「こころ」に架ける橋—, 漱石研究 9 (1997)
- 145) 十川信介：活字と肉筆のあいだ—「心」の「原稿」から—, 文学 9-1 (1998) (→明治文学—ことばの位相^{B08})
- 146) 藤井淑慎：解説, 夏目漱石 1, 日本文学研究論文集成 26^{N55}, 若草書房 (1998)
- 147) 片岡豊：解説—9 0 年代の〈漱石〉研究, 夏目漱石 2, 日本文学研究論文集成 27^{N56}, 若草書房 (1998)
- 148) 小森陽一：まえがき, 漱石を語る 1, 2^{N57}, 翰林書房 (1998)
- 149) 石原千秋：あとがき, 漱石を語る 1, 2^{N57}, 翰林書房 (1998)
- 150) 小森陽一：「こころ」と個人の自由の問い直し, 世紀末の予言者・夏目漱石^{N59}, 講談社 (1999)
- 151) 篠崎美生子：「こころ」—闘争する「書物」たち—, 日本近代文学 60 (1999) (→作品論集成 3^{K09})
- 152) 松澤和宏：「心」における公表問題のアポリア—虚構化する手記—, 日本近代文学 61 (1999) (→作品論集成 3^{K09}) (→生成論的探求^{B06})
- 153) 石原千秋：夏目漱石をどう読むか?—「いま」を読むこと, 解釈と鑑賞 66-3 (2001) (→テキストはまちがわぬ^{B07})
- 154) 猪熊雄治：解説, 夏目漱石「こころ」作品論集, 近代文学作品論集成 3^{K09}, クレス (2001)
- 155) 宗像和重：「こころ」を読んだ小学生—松尾寛一宛漱石書簡をめぐる—, 文学 2-4 (2001)
- 156) 関口収：「こころ」—登場人物「妻」の考察と「お嬢さん」について—, 江古田文学 48^{N60} (2001)
- 157) 盛忍：漱石「こころ」論—変容する罪障感, 作品社 (2002)
- 158) 平岡敏夫：「こころ」—佐幕派的なものの終結—盛忍「漱石「こころ」論」を介して, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 159) 藤井淑慎：「自白の書」としての「心」, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 160) 石井和夫：漱石の「こころ」, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 161) 中沢けい：先生の海水浴, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 162) 木下豊房：因果論のコードか、不確定性のコードか—「こころ」を読むの問題, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 163) 唐須敬光：「先生」のバランス感覚—「アンジェロ」との比較から, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 164) 山本雅男：「こころ」の考現学, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 165) 尹相仁：「こころ」から「心」へ—漱石による脱「漱石」への試み, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 166) 神谷正明：「明治の精神」と「先生」をめぐる—「こころ」小論, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 167) 橋川俊樹：「こころ」はどのように書かれたか, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 168) 伊藤氏貴：「こころ」—あるいは恋の手本, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 169) 関口収：「こころ」における K について—K にとつての「道」とは, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 170) 山下聖美：「こころ」論の大海へ—検証「こころ」論ことはじめ, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 171) 勝原晴希：「こころ」をめぐる幾つかの考察, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 172) 米倉巖：「黒い影」の物語の文体—「こころ」寸論—, 江古田文学 52 (2003) (→特集・夏目漱石「こころ」^{K14})
- 173) 石原千秋：「こころ」と迷子になった読者, 漱石と三人の読者^{N61}, 講談社現代新書 (2004)
- 174) 石原千秋：「こころ」—大人になれなかった先生, みすず書房 (2005)
- 175) 水川隆夫：夏目漱石「こころ」を読みなおす, 平凡社新書 (2005)
- 176) 角川書店編：漱石の「こころ」, ビギナーズクラシックス近代文学編, 角川ソフィア文庫 (2005)
- 177) 木村澄子、山影冬彦：夫婦で語る「こころ」の謎—漱石異説, 彩流社 (2006)
- 178) 秋山豊：1 声を聞く〜14「心」と「こころ」, 漱石という生き方^{N63}, トランスビュー (2006)
- 179) 徳永光展：夏目漱石「心」論, 風間書房 (2008)
- 180) 佐々木雅彦：漱石の「こころ」を読む, 翰林書房 (2009)
- 181) 小谷野敦：「こころ」は本当に名作か—正直者の名作案内, 新潮新書 (2009)
- 182) 宮崎かすみ：もう一つの聖書物語—「心」における血の盟約, 百年後に漱石を読む^{N74}, トランスビュー (2009)

【漱石関連】

- N01 夏目漱石：余と萬年筆，萬年筆の印象と図解カタログ，丸善株式会社（1912）国会図書館所蔵（附／夏目漱石：余と萬年筆）〔復刻／丸善（1989）〕
- N02 寺田寅彦：夏目先生（ローマ字表記），ローマ字世界 1917-1（1917）（→寺田寅彦全集第九卷，岩波書店（1997））
- N03 松岡謙：漱石と「新思潮」（19??）（→夏目漱石：こころ他一編^{T14}），旺文社文庫（1980）
- N04 寺田寅彦：夏目漱石先生の追憶，俳句講座 1932-12（1932）（→寺田寅彦：蒸発皿，岩波書店（1933））
- N05 小宮豊隆：漱石襍記，小山書店（1935）
- N06 辰野隆：漱石の印象（1935）（→忘れ得ぬ人々，辰野隆隨筆全集第1巻，福武書店（1983））
- N07 野上弥生子：夏目漱石の思ひ出，文芸 3-5（1935）、ほか関連隨筆 5件（→野上弥生子全集第19、22、23巻，岩波書店（1982））
- N08 中谷宇吉郎：書評（小宮豊隆著・夏目漱石），日本の科学 1938-11（1938）（→中谷宇吉郎隨筆選集第一巻，朝日新聞社（1966））
- N09 小宮豊隆：漱石の芸術，岩波書店（1942）
- N10 荒正人（編）：漱石伝記篇，夏目漱石全集第十一巻，創芸社（1954）
- N11 荒正人（編）：漱石研究篇，夏目漱石全集第十二巻，創芸社（1954）
- N12 伊藤整、吉田精一（編）：夏目漱石全集（角川版）別巻，角川書店（1960,1973）
- N13 吉田精一：夏目漱石，近代文学注釈体系，有精堂（1965）
- N14 高木文雄：漱石の道程，審美社（1966）
- N15 森田草平：夏目漱石，筑摩叢書 90，筑摩書房（1967）
- N16 古川久：漱石の書簡，東京堂（1970）
- N17 藤藤淳：漱石とその時代 1～5，新潮選書（1970-1999）
- N18 日本文学研究資料刊行会（編）：夏目漱石、II、III，有精堂（1970,1982,1985）
- N19 高木文雄：漱石文学の支柱，審美社（1971）
- N20 猪野謙二（編）：夏目漱石集，明治文学全集 55，筑摩書房（1971）
- N21 吉田精一（編）：夏目漱石研究，全集類聚・夏目漱石全集別巻，筑摩書房（1973）
- N22 小坂晋：漱石の愛と文学，講談社（1974）
- N23 平野謙、小坂晋：漱石文学と大家橋緒子，漱石の愛と文学^{N22}付録，講談社（1974）
- N24 荒正人：漱石研究年表，（集英社版）漱石文学全集別巻，集英社（1974）
- N25 江藤淳：決定版・夏目漱石，新潮社（1974）
- N26 文芸読本・夏目漱石、II，河出書房新社（1975）
- N27 岩波書店：漱石全集月報（昭和三年版、昭和十年版），岩波書店（1976）
- N28 宮井一郎：夏目漱石の恋，筑摩書房（1976）
- N29 平岡敏夫：漱石序説，塙書房（1976）
- N30 江藤淳（編）：朝日小事典・夏目漱石，朝日新聞社（1977）
- N31 相原和邦：漱石文学—その表現と思想—，塙選書 87，塙書房（1980）
- N32 竹盛天雄（編）：夏目漱石必携、II，別冊国文学 5.14，学燈社（1980,1982）
- N33 山田輝彦：夏目漱石の文学，近代の文学 14，桜楓社（1984）
- N34 三好行雄（編）：夏目漱石，鑑賞日本現代文学第5巻，角川書店（1984）（附／三好行雄：夏目漱石の人と作品）
- N35 内田百閒：漱石先生雑記帖，河出文庫（1985）
- N36 平岡敏夫：漱石研究，有精堂（1987）
- N37 石井和夫：夏目漱石，現代文学研究・情報と資料，至文堂（1987）
- N38 稲村徹元（監修）：夏目漱石，近代作家追悼文集第五巻，ゆまに書房（1987）
- N39 秋山公男：漱石文学論考—後期作品の方法と構造—，桜楓社（1987）
- N40 小林一郎：夏目漱石の研究，至文堂（1989）
- N41 米田利昭：わたしの漱石，勁草書房（1990）
- N42 佐々木英昭：夏目漱石と女性—愛させる理由—，叢刊・日本の文学 15，新泉社（1990）

- N43 井上百合子：夏目漱石試論—近代文学ノート，河出書房新社（1990）
- N44 夏目伸六：父・夏目漱石，文春文庫（1991）
- N45 斎藤均：夏目漱石の房総旅行—「木屑録」を読む—，ふるさと文庫，斎書房（1992）
- N46 小森陽一、石原千秋（編集）：漱石研究 1～18，翰林書房（1993-2005）
- N47 中村寛夫、秋山豊ほか：インタビュー・新「漱石全集」刊行にあたって，漱石研究 1（1993）
- N48 夏目鏡子（述）、松岡謙（筆録）：漱石の思い出，文春文庫（1994）
- N49 小森陽一：漱石を読みなおす，ちくま新書（1995）
- N50 漱石言行録，漱石全集（岩波新版）別巻，岩波書店（1996）
- N51 半藤一利：漱石先生ぞな、もし，文春文庫（1996）
- N52 長尾剛：漱石ゴシップ，文春文庫（1997）
- N53 石原千秋：反転する漱石，青土社（1997）
- N54 長尾剛：もう一度読む・夏目漱石，双葉社（1997）
- N55 藤井淑慎（編）：夏目漱石 1，日本文学研究論文集成 26，若草書房（1998）
- N56 片岡豊（編）：夏目漱石 2，日本文学研究論文集成 27，若草書房（1998）
- N57 小森陽一、石原千秋（編）：漱石を語る 1、2，翰林書房（1998）
- N58 嵐山光三郎：夏目漱石，追悼の達人，新潮文庫（1999）
- N59 小森陽一：世紀末の予言者・夏目漱石，講談社（1999）
- N60 特集・夏目漱石—新しい漱石像を目指して—，江古田文学 48（2001）
- N61 石原千秋：漱石と三人の読者，講談社現代新書（2004）
- N62 高橋昭男：漱石と鴉外，新潮新書（2006）
- N63 秋山豊：漱石という生き方，トランスビュー（2006）
- N64 知つ得・夏目漱石の全小説を読む，国文学増刊 39-2（1994-1）改裝版，学燈社（2007）
- N65 江戸東京博物館・東北大学（編）：文豪・夏目漱石—そのころとまなざし—，朝日新聞社（2007）
- N66 松岡陽子マックレイン：漱石夫妻・愛のかたち，朝日新書（2007）
- N67 夏目漱石：直筆で読む「坊っちゃん」，集英社（2007）（附／秋山豊：自筆原稿を「読む」たのしみ）
- N68 志村史夫：漱石と寅彦—落椿の師弟—，牧野出版（2008）
- N69 加藤湖山：謎解き・若き漱石の秘恋，アーカイブス出版（2008）
- N70 三浦雅士：漱石—母に愛されなかった子—，岩波新書（2008）
- N71 河内一郎：漱石のマドンナ，朝日新聞出版（2009）
- N72 吉本隆明：夏目漱石を読む，ちくま文庫（2009）
- N73 夏目房之介：孫が読む漱石，新潮文庫（2009）
- N74 宮崎かすみ：百年後に漱石を読む，トランスビュー（2009）

【文学ほか】

- B01 相馬黒光：黙移（1936）（→黙移—明治・大正文学史回想（新装版）法政大学出版局（1977））
- B02 浅井清ほか（編）：研究資料現代日本文学 1～7，明治書院（1980）
- B03 近代小説研究必携—卒論・レポートを書くために 1～3，有精堂（1988）
- B04 竹盛天雄：明治文学の脈動—鴉外・漱石を中心に—，国書刊行会（1999）
- B05 戸松泉：小説の〈かたち〉・〈物語〉の揺らぎ—日本近代小説「構造分析」の試み—，翰林書房（2002）
- B06 松澤和宏：生成論の探求—テキスト・草稿・エクリチュール—，名古屋大学出版会（2003）
- B07 石原千秋：テキストはまちがわらない—小説と読者の仕事—，筑摩書房（2004）
- B08 十川信介：明治文学—ことばの位相—，岩波書店（2004）
- B09 石原千秋：百年前の私たち—雑書から見る男と女—，講談社現代新書（2007）
- B10 石原千秋：謎とき村上春樹，光文社新書（2007）

〈付録 2〉 PBL テーマリスト

- 寺田寅彦（1.生涯、2. 隨筆「どんぐり（団栗）」、3.隨筆「科学に志す人へ」）
- 中谷宇吉郎（1.生涯、2.隨筆「I 駅の一晩」、3.隨筆「天災は忘れた頃来る」）
- 石原純（1.隨筆「チューリップにおけるアインシュタイン教授」、2.隨筆「アインシュタイン教授をわが国に迎えて」）
- 藤岡由夫（1.隨筆「寺田先生とゼロ」、2.隨筆「科学的な考え方」）
- 湯川秀樹（1.隨筆「自己発見」、2.隨筆「独創について」）
- 朝永振一郎（1.生涯、2.隨筆「わが師・わが友」、3.隨筆「仁科先生の温情に泣く」）
- 長岡半太郎（1.生涯、2.隨筆「学生時代の丸善回顧」）
- 遠山啓（1.生涯、2.隨筆「教育の中の自由」、3.隨筆「ねずみ算今昔」）
- 高木貞治（1.生涯、2.隨筆「明治の先生がた」）

- 岡潔（1.生涯、2.隨筆「人の情緒と教育」、3.隨筆「中谷治宇二郎君の思い出」）
- 吉岡修一郎（1.隨筆「インチキ算術（算数）」、2.隨筆「年齢あて遊び」）
- 糸川英夫（1.隨筆「フォートサービス」、2.記事「アメリカのマネージャーの恐さ」）
- 八木秀次（1.隨筆「博士をつくる話」、2.隨筆「英才教育について」）
- 披山四郎（1.隨筆「強盗の仕方」、2.隨筆「安全の心掛け」）
- 森政弘（1.記事「ドスとメスの境目」、2.記事「ロボコンともの作りの効果」）
- 川上正光（1.記事「Teaching-Learning 型から Education-Study 型へ」、2.記事「エンジニア心得帖」）
- 井本稔（1.隨筆「役立つ技術者」、2.隨筆「幸福ということ」）

小山工業高等専門学校 電子制御工学科

E-mail : kubo@oyama-ct.ac.jp

「受理年月日 2009年9月30日」